

# 書家、本紙にエッセー連載

84 歳

## 榊莫山さん死去



戦後書壇  
の風雲児と  
呼ばれ、焼  
酎のCMな  
どお茶の間

菅蒲池1282。密葬は5  
日に済ませた。喪主は妻、  
美代子（みよこ）さん。

（25面に関連記事）

にも人氣のあった書家、榊  
莫山（さかき・ばくざん、  
本名・齊はじむ）さんが

3日午前4時13分、急性心  
不全のため奈良県天理市内  
の病院で死去していたこと  
が5日、分かった。84歳だ  
った。自宅は三重県伊賀市

庁、民間企業だったら、こ  
んな対応では絶対持たな  
い」と警察と司馬斐係者は批

大正15（1926）年、三  
重県上野市（現・伊賀市）に  
生まれ、旧制中学時代から  
書を始め、戦後、書家の辻本  
史昂に師事した。日本書芸  
院展に出品した杜甫の詩な  
どで、推薦一席という最高  
賞を昭和26年から2年連続  
受賞。前衛書道の奎星会で  
も最高の奎星会賞を連続受  
賞し、20代で日本書芸院と  
奎星会の審査員となった。

しかし、30代のとき書壇  
の体質や構造への疑問から  
審査員を辞して、すべての  
肩書を捨てて野に下った。  
天女のしなやかなほほ笑み  
に、詩を交えた作品「天平ノ  
首飾り」など詩書画一体の  
新しい世界を切り開いた。  
作品が醸し出す雰囲気と  
同じく、温かみのある人柄  
で、焼酎のCMなどにも出  
演し、お茶の間にも人氣が  
あった。平成15（1999）年に、  
本紙に日常の出来事をつづ  
ったエッセー「ばくざん  
流」を連載した。

# 天衣無縫の書芸術

## 莫山流「何にも縛られぬ」

書のみならず、絵や文筆

の分野でも多才を発揮した書家、榊莫山さんが亡くなった。何ものにもとらわれないおらかな作風は、若

き日からの自由闊達な生きざまをそのまま映してき

た。昭和の「文人」は独自の芸術世界を切り開き、天衣無縫の人生を貫いた。

詩、書、画が一体となった独特の「莫山芸術」。親しみやすい作風は豪快な人柄とも相まって、多くのフ

アンを生んだ。その芸術の源を問うと、莫山さんはこ

う答えた。「なりゆきまかせの人生を送ってきたから、そんなところが作品に出

てるんやろな」

莫山さんを書の世界へ導いたのは昭和21年の第1回正倉院展だった。

20歳を迎えたばかりの青年は三重の自宅から列車を何度も乗り継いで駆けつけた。だが、長蛇の列。展覧

会を見ることはできなかったが、青年はその足で、本

で知っていた奈良在住の書家で、当時書道界のカリスマ的存在だった辻本史邑を

訪ねたことから、人生の方向が定まる。

しかし莫山さんの自在な生き方は、孤高の境地を求めてやまなかった。辻本が創設した日本書芸院展で最

高賞を得るなど将来を期待

されながら、師の死去とともに、30代前半の若さで所属するすべての会を脱し書壇から退く。

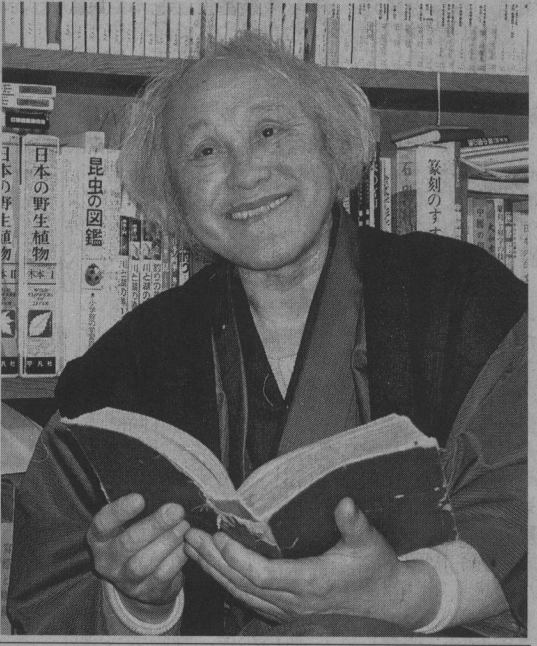
ここから「何にも縛られない、自由な創作」を求めて

進み、旧制中学時代に習っていた絵などをミックス

した、前衛的な莫山流の書芸術が開花した。いけば

な、古典芸能など異分野とのコラボレーションなども

手がけ、活動の舞台を広げた。豪放な人柄の一方、漢字や書などで緻密な研究を進め、エッセーなどを含め100冊を超す著作も、ひょうひょうと味わい深い文



自宅の書齋でくつろぐ榊莫山さん。三重県伊賀市(平成13年12月28日、早瀬廣美撮影)

体で人気を集めた。形式にとらわれず「土

### 書き順 大胆見解も

宗教学者、山折哲雄さんの話「莫山さんは毎日『土』という一文字を書い

が、近年書かれたという遺言には、自らが亡くなった「届けを出すだけでいい。葬式はいらない」と記されていた。自由な生きざ

隠れたベストセラー かがみん

肌を美人 輝き…実感!

**緑茶石鹸** 95g(税込) **¥525**

サンプル進呈します。是非お問い合わせ下さい。

0120-35-7000

(株)宇治森徳 大阪府松原市三宅西5-716-3

「女」といった分かりやすい漢字やカタカナなどを多く書き、一目で「ばくさん流」と分かる表現を開いた莫山さん。今年に入り体調面から引退を表明していた

ていたが、ある日、書き順に疑問を持ったという。土は万物のエネルギーを垂直に持ち上げるのだから、正しい筆順とは逆となるが、縦棒は下から上に跳ね上げ

まは、最後まで変わることにはなかった。(坂下芳樹) 11面参照

るべきだと説いていた。そのダイナミックな見解に私はすっかり莫山さんのファンになった。惜しむらくは、土の字の個展を見られなくなったことです」